

チュン ヤオ
瓊 瑤 著

『^{バイ}白^{フウ}狐』 (Ⅱ)

呉 世 煌 訳

第 四 章

県知事葛雲鵬コウユインボン バイクニヤンが白姑娘バイクニヤンの嫁入先を探しているという噂はたちまち広がって行った。県知事の屋敷は晝夜の別なく多くの仲人婆さんが出入りして急に賑やかさを増した。白姑娘バイクニヤンについてのもろもろのことが屋敷内の召使達の口から外に洩らされていた。花のかんばせで歌舞にすぐれ、そのうえ『法力』底知れずというのであるから好奇心に駆られぬ者はない。また県知事である雲鵬ユインボンが呉れるという豪華な嫁入道具一式バイクニヤン、加えて白姑娘を『狐仙』と思いこんでいる人々には、嫁に貰えば其の家の禍わざわいが除かれ、福しあわせが訪れると信じて疑わず、まさに、てんやわんやの騒ぎとなった。

弄玉夫人ノンユイは仲人婆さんとの応対に忙しく、雲鵬ユインボンは求婚者の身もと調べに日を追われていた。

だが吟霜インシオアンは縁談の噂が飛んでからこの方、日頃の活発さを失い顔からは笑いが消え、深閨¹⁴⁾にとじこもったまま顔を見せなくなった。彼女は日増し痩せ細り、顔色はすぐれず、言葉少なになった。しかし彼女の様子を見た屋敷うちの人々は恥ずかしがっているのだと早合点して気にもとめなかった。

ただ一人雲鵬ユインボンだけはその様子に気付いていた。彼女の日頃のユインボンにこやかな笑顔が見られず、さわやかな笑い声が聞かれなくなった昨今、雲鵬は終日鬱々として楽しむところがなかった。……或は彼女は自分の縁談に不安が有るのではあるまいか？ 無理はない。自分の理想にかなった相手かどうか、又一緒に暮せるかどうかも知らずに、逢ったこともない同士が夫

訳註14) 婦女の居室のこと。「閨室」ともいう。「閨」は女子の居間、転じて女子の意にも用いられる。

婦になるのだからな。……^{ユインボン}雲 鵬は彼女の縁談について一層慎重に考えるようになった。

この日、^{ノンユイ}弄玉夫人はひとり^{ユインボン}雲 鵬の書斎に入ってきて、

「あなた、^{チヤン}城北の張家を御存知でしょう？^{チヤン}綽名が張百萬という方？」と尋ねた。

「うん。あれは毛皮間屋を幾つか持っている。専ら狩猟だけで、財をなした人だ。手もとに獵師を何百人も置いているとか、それがどうしたのだ？」

「その方も^{インシオアン}吟 霜を息子のお嫁さんにと言っていたのかもしれませんが、お話では、三男坊で目鼻立ちも勝れ学問もお有りとか。如何なものでございましょう？」

「そうだなあ……」

^{ユインボン}雲 鵬はしばらく考えこんでいたが、やがて気が進まぬ風に答えた。

「悪くはないが残念なことに士分の家柄でないのではな」

「それでは、^{リウ}劉秀才さんのお坊ちゃんは如何でしょう？」

「そうだなあ……あれも悪くはないな。ただ士分の家柄はいいが、ひどく貧乏なのでな」

^{ノンユイ}弄玉夫人はおかしさをかくしきれずに思わずクスッと笑い、上目づかいにそっと夫の様子を伺っていた。しばらく沈黙が続いた。

「あなたはどうしても^{インシオアン}吟 霜を嫁に出すおつもりですか？」

「なぜだね、もうあれのためにこうして縁談を進めているではないか？」

^{ユインボン}雲 鵬は椅子に依りかかり、^{もてあそ}いらだちを覚えながら机上の文鎮を弄んでいた。

「娘が大きくなったら嫁にやるものじゃ」と自分に言い聞かせる様につぶやいた。

「でも^{インシオアン}吟 霜の嫁入先を探すのはなかなかむづかしいことのようにございます」

^{ノンユイ}弄玉夫人は微笑みながら夫を揶揄するように言った。

「^{ウー}呉家の二番目の坊ちゃまは家柄はいいし学問もお有りですのにあなた

は、頭が大きくて体が小さい、格好が悪いとおっしゃる。劉家の坊ちゃまも条件はすべて宜しいのに、頭が小さくて体が大きいと貶される。高家のお方は美男でお金も有り力もありますのに再婚だからいけない。かと思えば袁家の坊ちゃまは初婚ですのあなたに、年は若すぎる、吟霜の弟になら釣り合うがおっしゃる。張家は士分の家柄ではないし、劉家は貧乏すぎると……ああ！旦那様、あなたは一体どう言うお婿さんならお気に召すのですか？そうこうしている間に、吟霜は白髪のおばあちゃんになってしまいますよ」

雲鵬は眉をひそめながら

「まさか！吟霜はなにかわしを怨んでいるわけではあるまいな？それとも待ちきれぬほど早く嫁に行きたがっているのかな？」と言った。

「あらっ！あなた、吟霜のことをそんなふうにおっしゃってはなりません。あなたがあれのことを心配していらっしゃるのでしたら、あの娘が前ほど元気がないのにお気づきのはずでございます」

「では、どうしたのかな？」

雲鵬は更に不安が募った。

「それは、私にもわかりません。ただこの春先から顔色が冴えず部屋に閉じこもる様になりました。旦那様！あなたが婿さがしをなさるのもよろしゅうございますが本人の考えもお聞きにならなくては……なんといってもあの娘は葛家の娘ではないのですから」

「それはお前の役割だ、お前の方で聞いてくれ、或はもうあれに心の中でこれぞと決めた嫁ぎ先があるのかも知れぬ」

「私もそうは思いました。でもあの娘は何も申しません。私にはどうしようもございません。あなたがじかにお聞きになられては如何でしょう。あなたは、あの娘の命の恩人ですもの、正直に打ち明けて呉れるかも知れませんわ」

「命の恩人だと？わしはただあれの父親を弔うのに手を貸してやっただけだ。命の恩人だなど片腹痛い！」

「あらっ！私が申しているのはそんなことではございません！」

弄玉夫人は簾をあげて座敷を出ながらふり向いて笑顔を返し

「御自分でよく御存知のはずですのに、」と言った。

弄玉夫人が退出した後、雲鵬は一人、竹簾に見入っていたがその目は虚であった。

突然、花園から琴の音に和して歌声が聞こえてきた。吟霜の声であると彼にはわかっていた。彼は無意識にあごを手のひらにおき、静かに耳を傾けた。

『香夢より回^{かえ}りて、
紅鷺^{こうえん}の蒲団より褪^ぬけ出す、
檀唇に重ねて胭脂を点け、
匆々に抛^{もとどり}家髻を結びたり。
此の春愁を如何にせん？
……………」』

これは吟霜にめぐり会ったあの日にわしが聞いた元曲の一節ではないか？雲鵬はうっとりと聞き入った。やがて彼は茶を一杯すすると花園寄りの窓辺に歩み寄り、簾を巻きあげた。琴の音が戛然として止まった。落^{らく}莫^{ばく}たる思いが緩^{ゆる}りと彼の心を包んだ。

その晩、雲鵬は書齋に籠^{こも}って書見をしていた。傍に書童の喜児が待っていた。突然入口の簾^{みす}がかきあげられると、そこに吟霜が立っていた。彼女は微笑みながら雲鵬に向^{むか}って深々と礼をした。

「奥様のお言いつけで参りました。旦那様が私に何かお話があるとのことでございますが？」

「弄玉めが縁談の事は女同士で話せば手っ取り早いものを、なにをわざわざこのわしにさせるのだ、まあ、よい、どうせ来たからには、この際、はっきり聞いておくのもよかろう。彼は頷いて喜児を引き下がらせた。

「戸を閉めて、こちらにお座り。まあゆっくり話をしようじゃないか」

吟霜は言いつけられた通り、戸を閉め、雲鵬のそばにある低い腰

掛に座った。彼女は話の内容をあらかじめ知らされているかの様に項垂れ、眼は、じっと下を見ていた。

「話に依れば、近頃、気分がすぐれないそうだが？」

ユインボン 雲鵬は話しながら、彼女を観察した。なるほど頬はこけ、腰も痩せ細って、一層楚々として人の憐れをそそる風情であった。

「いいえ、なんともございません。旦那様」

「わしが、そなたの婿探しをしているのは、存じておろうな！」

ユインボン 雲鵬は単刀直入にそう言って、じっと インシオアン 吟霜を見やった。

インシオアン 吟霜はかすかに体をふるわせて、じっと黙りこんだ。顔色は一層青ざめていた。

「恥ずかしがらなくとも良い。インシオアン 吟霜、そなたも知っての通り、ゝ男は成人すれば妻を娶り、娘は大きくなれば嫁に行くゝ、これは人たる者の辿る当たり前前の道筋ではないか」

インシオアン 吟霜は依然として押し黙ったままだった。

「わしは、そなたにふさわしい身分の若者を幾人か考えてみたのだが、さてその中から一人選ぶとなると、どうもむつかしくてな。ことはそなたの一生に関わるのだから、先ずそなたの意見を聞かねばと思ってな」

インシオアン 吟霜はまだ黙っていた。

インシオアン 「吟霜よ、そなたは聞いているのか？」

インシオアン 吟霜は吃驚して顔を上げた。つぶらな瞳に涙が光っていた。その表情は悲しみと絶望に満ちていた。

「はい、旦那様」

彼女は聞きとれない程の小さな声で答えた。

「なら、そなたはどのようなところに嫁ぎたいのじゃ？今、チヤン 張家から縁談が来ている。城北の張百萬だ。知っているかな？」

インシオアン 吟霜は唇を強く咬んだ。

「なぜ返事をしないのか？」

ユインボン 雲鵬は眉を擡めた。

「なににもかも旦那様におまかせいたします」

インシオアン

吟霜は喉をつまらせながら血を吐くような思いで答えた。

「父の葬式を出して戴いてこの方、私はすでに旦那様にこの身をお売り致しているのをごさいます。旦那様がいかようになされましょりとも、私めに異存はございません」

ユインボン

インシオアン

雲鵬はおどろいて吟霜を視た。彼女の表情に絶望が漲り、その声は悲しげであった。なぜだろう。彼女はこの縁談に不足があるのだろうか？彼女も先方が士分の出でないのが不満なのだろうか？

リウ

「では、劉秀才さんのところなら宜しいかな？」

「旦那様のおよろしいように」

インシオアン

吟霜の答えは同じであった。が、見る見るうちに涙が溢れ、頬を伝わってこぼれ落ちた。彼女はそっと袖で涙を拭った。彼女はいつものように全身白い衣裳で、腰には白い緞子の帯を緊めていた。

インシオアン

その飄然とした美しさに彼は見とれた。吟霜はそっと立ち上がると小さな声で、伏目がちに尋ねた。

「旦那様、退ってもよろしゅうございませるか？」

インシオアン

「おまち！吟霜！」

ユインボン

雲鵬は思わず叫んだ。

インシオアン

吟霜は立ちどまった。

「呎、そなたの歌を聞いた……もう長い間そなたの歌を聞かなかったな」

ユインボン

雲鵬は壁から琴を下した。

「一曲聞かせて呉れまいか？」

インシオアン

彼は心の中でふと吟霜を手離し難い思いにとらわれた。

インシオアン

吟霜は、素直に琴を受取ると、椅子に座り、琴を膝の上に置いた。彼女は軽く調子をととのえると、やおら顔をあげ雲鵬を見つめた。

「旦那様、なににいたしましょるか？」

「そなたが好きなもので良い」

インシオアン

吟霜は、首を傾けてしばらく考えていたが、ふたたび顔をあげて雲鵬を見詰めたその瞳は異様に輝いていた。彼女は弦を弾きながらも生々とした眼差しを雲鵬に注いでいた。やがて軽やかに唄いはじめた。

『雙眉暗鎖，
心事誰知我？
舊恨而今較可
新愁去後如何？』

双眉は暗くとざされ，
われが想い，誰か知る？
旧恨，今はまだしも，
新愁さりにし後を如何にせん？』

彼女の視線を受け止めながら聞き入っていた雲鵬^{ユインガフ}は、その歌詞に心をうたれ、愛しい^{いと}思いでじっと彼女を見詰めた。彼女の頬に赤味が差して来た。調べを変えて、また唄い出した。

『知否？知否？
我為何不捲珠簾，懶得拈針挑繡？
知否？知否？
我有幾千斛悶懷？幾百種煩憂？
知否？知否？
多少恨才下心頭，却上眉頭？
知否？知否？
看它春色年々，我的芳心依舊？
知否？知否？
一片心事難出口，誰憐我鎮日消瘦？
知否？知否？
恨箇人心意如鐵，我終身休配鸞儷？
知否？知否？
身如飄萍難寄，心事盡付東流？
休休，

似這般不解風情，辜負我一番琴奏！

君知るや？なぜに我は珠簾を捲かず，刺繡を怠りしか？

君知るや？我に幾千の悶，幾百の憂があるを？

君知るや？幾多の恨が心にせまり，眉に宿るを？

君知るや？青春は年を逐いて過ぎ逝りしも，我の心は変わらじを！

君知るや？慕う心は口に出し難くも，我日々瘦せ細るを誰が憐む？

君知るや？心，鉄が如き人を恨み，我鸞鳳封になるを断念す！

君知るや？この身，浮草の如く止まり難く，想いは皆，水の流れに託す！

生まれ！斯様風情解せずして，あたら琴を奏でるを！』

ひとしきりはげしい調子のしらべが続いて演奏が終わつた。あたりは静かになった。吟霜^{インシオアン}はさっと立ち上がり，琴を椅子の上に置くと，体の向きを変えて背を雲鵬^{ユインボン}に向け，しきりに袖で涙を拭くのであった。彼女の肩は震え，喉は噎^むせんでいた。彼女は震える声で，

「退らせて戴きます」と言った。

雲鵬^{ユインボン}の胸は高鳴り，呼吸は乱れ，目まいがした。やがて彼はふらふらと前に進み出た。気がつくとその手はいつのまにか吟霜^{インシオアン}の肩を押えていた。

「吟霜^{インシオアン}！」

その一言に，雲鵬^{ユインボン}のあらゆる想いがこめられていた。

さっと身を翻して面と向かった吟霜^{インシオアン}の顔は，涙の痕で汚れていたが，瞳は涙にぬれて，あやしく光り輝いていた。彼女は畏れも羞じらいも忘れて雲鵬^{ユインボン}をじっとみつめていた。その顔は情熱の焰^{ほのお}に彩どられて，ぞっとするほどの美しさであった。

「旦那様！」

激しく，絶え入るような声でそう叫ぶと，彼女は身をかがめて雲鵬^{ユインボン}の足もとに跪き，顔を擡^{もた}げしっきりした声で

「私は葛家の門をくぐりましてからこの方、一度でもこちらを離れようと思ったことはございません。今こうして旦那様が私をお気に召さずに、嫁に出すとおっしゃるのでございましたら、私はいっそ死んだ方がましでございませぬ！」と言った。

雲 鵬の心は激流のように躍った。狂喜の裡にも悲哀がこもり、憐惜の情にも歓喜が入り混じた。その悲喜交々の情のもつれは、彼のその鉄石の心を見じんじんにうち砕いた。愛憐の想いをこめて見詰めていた彼は、思わず吟 霜の頭を掻き抱いて、やさしく語りかける様に言った。

「そなたは本当にそう思っていたのか……そなたにも分ってもらいたいのだ。そなたは今にもほころびようとする白梅の蕾のように美しく清らかで、わたしにはそれを手折る勇気がなかったのだ。そなたを嫁に出すのはわたしにとっても、どれほど苦痛であり、どれほど心に迷ったことか！」

ああ！吟 霜よ、そなたは本当にそう思っていたのか、本当に？」

吟 霜はじっと彼を見上げていたが、その輝く星のような瞳は、素直に「本当です！本当です！」と叫んでいた。雲 鵬はためらうことなく吟 霜の手を取るとそっと彼女を胸に抱いた。彼女のほつれ毛と耳かざりが甘く彼の頬をくすぐる。

「ああ、憐れ、薄幸にして側室に甘んずか！」

「私が薄幸でございましょうか？」

吟 霜は夢心地でつぶやくように言った。

「わたしの薄幸な時期はもう終わったのでございます。これからはきつと幸福と歓喜で一杯！旦那様や奥さまのお膝もとで暮らせるのですもの、これ以上のよろこびがどこにございましょう？」

雲 鵬に言葉は無かった。彼の心は満ち足りていた。二人は黙ってその幸福に浸った。……………

窓の外で、ずっとその様子を見ていた弄玉夫人はそっとその場を離れた。その顔にも喜びが充ち溢れていた。さて、さっそくこれまでの縁談を

お断りしなくては¹⁵⁾……それから吟霜の新しい住いをどこにどう造ろう？
白狐ノ恩に報いると言われる白狐だものノ彼女はきっと雲鵬^{クモトウ}の為に男の
子を生んでくれるわ、きっと……そう弄玉夫人は心の中で思った。

第五章

果たして翌年の夏、吟霜^{インシヨアン}に男の子が生まれた。これほど喜ばしい事がまたとあろうか？屋敷うちでは晝夜を分かたず爆竹が鳴り、役所の前では村びと達が集まって獅子舞いや龍の舞い¹⁶⁾で賑わった。弄玉夫人は人を呼んで舞台をつくらせ、何日も夜を徹して芝居をやり、皆を喜ばせた。屋敷うちの人々は皆きらびやかに着飾り、笑いが絶えなかった。老僕の葛昇^{カクシヨウ}は、人を捉えては<白狐報恩>の謂われを説いて廻った。三十を過ぎて初めて跡継ぎを得た雲鵬^{クモトウ}の喜びは格別であった。屋敷うちに於ける吟霜の地位も一層重みを増した事はいうまでもない。弄玉夫人は家人達に、今後吟霜^{インシヨアン}を「嬢娘」¹⁷⁾と呼ぶことをやめ「二夫人」¹⁸⁾と呼ぶように命じた。また、みずからも吟霜^{インシヨアン}に妻妾間の礼を廃めさせ、姉妹としてつきあうよう要望した。彼女は親身の姉以上に吟霜^{インシヨアン}を可愛がった。吟霜の方も寵^{タシ}を得んで驕らず、以前にも増して謙虚で礼を失せず、温和に人に接したので、誰もが彼を称え、愛し、尊敬した。

ところが、このお産で吟霜^{インシヨアン}の健康はひどくそこなわれ、痩せ細って顔

訳註15) 原文は「庚帖を戻す」となっている。「庚帖」はまた、〔八字帖〕・〔八字〕・〔媾帖〕、〔小帖〕とも言う。それは生まれた年・月・日・時を干支で書き表した書付の事である。例えば、甲子（年）、丙寅（月）、丁丑（日）・癸卯（時）の如く、8字で表される。縁談の時これを交換して互いの合性を見る。

訳註16) 原文は「舞獅舞龍」。「舞龍」とは龍の形につくった布張子（はりこ）を、大勢で担いで舞うこと。この龍の全長は長いもので60メートルに及ぶものもあって、数十人の精悍な若者が交替でそれを担いで街をねりあるくので、極めて壮観である。

訳註17) 「嬢娘」は旧時めかけを表わす語であり、また〔嬢太太〕、〔嬢奶奶〕、〔小老婆〕、〔二房〕、〔如夫人〕とも言う。

訳註18) 「二夫人」は、二番目の奥さん、つまり、妾に対する敬称である。

色もすぐれなかった。出産してひと月めを祝う宴席¹⁹⁾にも無理をして顔を出したものの、それがもとで半月も経たずに、どっと病床に倒れてしまった。あちこちの名医に頼んだり、人参湯、燕の巣²⁰⁾等天下の奇草名薬を飲ませるなど、あらゆる手を尽したが効果はなく、眼に見えてやつれていくばかりであった。

雲鵬^{ユインボン}にとって、日増しに悪化する吟霜^{インシオアン}の病状に対する悩みは、跡継ぎを得た喜びで補えるものではなかった。病床の前に座った雲鵬^{ユインボン}は病人の痩せ細った手を取って、心配そうに彼女を見ながら言うのであった。

「吟霜^{インシオアン}よ、早く良くなってくれ。そなたが元氣をとり戻してくれないと、わしは全く仕事が手につかないのだ」

吟霜^{インシオアン}は微笑んでいたが、やつれ果てたその笑顔はかえって不憫に見えた。

「旦那様、ご免なさい。ご迷惑ばかりおかけして。それよりも気晴らしにどこかへ、お出かけになられましたら？」

「いやいや、そなたが全快したら、そなたと、そなたの姉さんも連れて一緒に出かけることにしよう」

「でも……」

吟霜^{インシオアン}は低くため息をつくとき、顔をそむけるようにして

「私には、もうそんな仕合せはございません」と言った。

雲鵬^{ユインボン}はぐっと吟霜^{インシオアン}の手を握り締めじっと彼女を見詰めた。彼には前から不吉な予感があったが、ただ彼は自分にその予感の存在を、許さな

訳註19) 原文「満月」は、赤ちゃんが誕生して、満一ヵ月目の事で、中国では数日にわたって、大々的に祝うのが習しである。

訳註20) つばめの巣の事を「燕窩」と言う。特に南洋の海辺に棲息する「金絲燕」(岩つばめ)の巣は絶壁につくられ、つばめが海藻類を唾液で固めて作るもので、中華料理の最高級の材料の一種である。とりわけ白色のものが上品で、灰色或は羽毛の混じたものを「毛燕」と言う。毛や筋など巣の中の夾雑物を除いたものが料理に用いられ、その料理の事を「燕菜」又は「燕窩菜」と言う。このようなつばめの巣の料理の出る上等の会席料理のことを「燕席」とか「燕翅席」と称する。

かった。いま インシオアン 吟霜 に言われて初めて彼の心は針に刺されたような痛みと異様な胸さわぎのするのを覚えた。

「吟霜、そんな風に考えてはいかん！そなたはまだ若いのだ！まだまだわしと末長く一緒に暮らすのだ！決してわしから離れてはならぬぞ…」

彼の額には脂汗がにじんだ。

「もう何も言うな。いいか インシオアン 吟霜、頑張って生き抜くのだぞ！わしのためにだ インシオアン 吟霜！お前はすべてを捧げてわしのために尽してくれる筈ではなかったか？どんなことがあっても、わしのために生き抜くのだ！お前がいないとわしはもう何の生き甲斐もなくなるのだ！」

インシオアン 吟霜は目にいっぱい涙を浮かべて ユインゴン 雲鵬 の手をやさしく撫でながら言った。

「旦那様、そんなことをおっしゃってはいけません。旦那様は立派な方ですもの、私がいなくなりましても、もっといい方が来て下さいます。ましてお姉さまもおいでのことですし……」

これではまるで訣別ではないか？ ユインゴン 雲鵬 は五臓六腑を引きちぎられるような思い²¹⁾であった。あわてて インシオアン 吟霜 の口を押えると、わめくように言った。

「もうよい！お前にはわしがどれほどお前を大切にし、どれほど深く愛しているか判っているはずだ。今は何も考えずにゆっくりと養生して、早く元気になってくれ。わしにはお前を失うことができない！決してお前を死なせはしないぞ！」

じっと彼を見詰めていた インシオアン 吟霜 の目からは涙がこぼれていたが、口もとには微笑が浮かんでいた。それは喜びと幸せに満ちた笑顔であった。

「ああ！旦那様！私のような帰る家もない さすらい 流浪の小娘が、このように旦那様に親身になって可愛がっていただけだったのでございます。死んでも心残りはありません」

「死ぬなんていうことを口にするでない！ インシオアン 吟霜！」

ユインゴン 雲鵬 は涙ながらに叫んだが、その時ふと ユインゴン 雲鵬 はひとすじの希望を見出

訳註21) 原文は「五内俱傷」。

した。

「そうだ、^{インシオアン}吟霜^{トンアル}、そなたは冬児を助けたことがあったな。冬児を助けることが出来たからには、当然そなた自身を助けることも出来る筈だ。／^{インシオアン}なあ吟霜、わしの為と思って自分を助けてくれまいか。／」

「且那樣は本当にそんなに私が死ぬのを恐れておいでなのですか？」

「^{インシオアン}吟霜」と叫びながら、^{ユインボン}雲鵬は彼女の手をかき寄せて、ひしと自分の胸に押し当てた。^{インシオアン}吟霜は彼の心がどんなに狂おしく躍っているかが分かった。彼女はまた一つ溜息をつくとき、静かにあきらめたような口振りで言った。

「且那樣、御安心下さいませ。^{インシオアン}吟霜はもう死には致しませんから」

「まことか、^{インシオアン}吟霜。／」

「まことでございます」

彼女はほほえんでいた。その笑顔を見ているうちに^{ユインボン}雲鵬は自分の願いが本当に叶えられるのだと悟った。もう大丈夫だ。／彼女は決して死にはしない。／彼は大きな重荷を卸したように感じた。もう大丈夫だ。／

ところが、夏が終わり秋風が立ち始める頃になると、^{インシオアン}吟霜は食欲が減退していちだんと痩せ細り、病床を離れることが出来なくなってしまった。

この様子を見た^{ノンユイ}弄玉夫人は妻妾の別を忘れて、病床につきっきりで看病した。彼女も「しっかりして早く良くなってね。／」と^{インシオアン}吟霜に願うのだった。

しかし、彼等の願いをよそに、^{インシオアン}吟霜は自分を助けることができず、ありありと日を追って死に近づいていた。^{ユインボン}雲鵬は落胆の度を増すばかりであった。

ある日、^{ノンユイ}弄玉夫人は終日^{インシオアン}吟霜の病室につめていた。三人は、いろいろ腹をうちあけて語りあった。

夜になって、^{ノンユイ}弄玉夫人は涙をうかべて^{ユインボン}雲鵬のところに来てこう言った。

「^{インシオアン}吟霜があなたに逢いたがっております。何かお話があるようです」

雲 鵬ユインボンは、はっとして、咄嗟とつさにこれはただ事でないと覺さとった。

「吟 霜インシオアンがあぶないのか？」

「いいえ、今の所、まだ大事ございません。でもすぐ行ってやって下さいませ」

雲 鵬ユインボンは吟 霜インシオアンの部屋に入って行った。片隅に煎じ樂がかけられていて部屋中にその匂いが漲っていた。机の上に灯が一つゆらゆらと寂しく揺れていた。

吟 霜インシオアンは白い蚊帳の中に臥せっていたが、ほのかに薄暗い光のあたっているその顔は、ますますやつれて痩せ細って見えた。

だが、彼女の黒々としたつぶらな瞳は、ふだんよりも一層輝きを増し、いきいきとしていた。

雲 鵬ユインボンは歩み寄って寝台のふちに腰を掛け、蒲団から出ている吟 霜インシオアンの手をそっとにぎった。その手は枯木のように瘦せて力は抜け、はめられている白翡翠の腕環がいかにも重そうに感じとられた。あたりを見まわしたが部屋の中はしんとして誰一人居なかった。あきらかに吟 霜インシオアンが召使い達をあらかじめ引き下がらせておいた様子であった。

「吟 霜インシオアン！」

彼は痛々しげに呼んだ。

吟 霜インシオアンはいつもの様に楚楚として可憐な微笑みを浮かべていた。

「旦那様にお越しいただきましたのは、私にお別れの時期が参ったからでございます。私はもうこれでおいとまをしなくてはなりません」

「吟 霜インシオアン！そなたはもう死なぬと約束したではないか？死んではならぬ！そなたを離すものか！」

雲 鵬ユインボンは我を忘れて、子供のように叫んだ。

「旦那様！」

吟 霜インシオアンは雲 鵬ユインボンを慰めるようにその手を軽くたたきながら言った。

「死には致しません！私は死ぬと申しているのではございません。ただ、これまで内証にしておいたことを今申し上げたいと存じます」

「内証だと？どんなことだね？」

ユインボン
雲鵬はいぶかしげに尋ねた。

「旦那様は勿論ご存じでございますね、私が恩を忘れぬ白狐だという噂を。ところで旦那様は私が本当に白狐だと思いでしょうか？」

ユインボン
雲鵬はまじまじと彼女を視た。

「勿論そうは思わぬ。インシオアン吟霜ノわしがもともと<狐狸の伝説>など信じておらぬことはお前がよく知っている筈ではないか？」

「でも、それは旦那様のお間違いでございます」

彼女は一つ溜息をつくと、率直で親しみに溢れた表情で言い続けた。

「私の申し上げたいのは、このことでございます……私は本当に山の中で旦那様に救われたあの白狐でございます。私はその恩に報いるために化身してこのお屋敷に入ったのでございます。その時私は心に誓いました——旦那様の為に男の子を一人生もうノそうすればこの大恩は返せたことになる——と。私はもう旦那様のために男の子を生みましたノ」

ユインボン
雲鵬は信じられぬ様子で見詰めながら彼女の額にさわって見た。熱はない気も確かなようだ。

インシオアン
「吟霜ノお前は自分が何を言っているかわかっているのか？」

「判っております、旦那様。気は確かでございます。私の話はみな本当でございます。旦那様ノ思い出して下さいませノ私がこのお屋敷に参りました時の経緯が、なにからなにまで偶然過ぎるとお思いになりませんか？旦那様ノ私は本当にあの『白狐』なのでございます」

「お前が人であろうと狐であろうと、わたしにはどちらでも良いのだ。わたしはただお前がいつまでも、わたしの側に居て元気でいてくれればそれで良いのだ」

「でも、旦那様、定めの時が来たのでございます。お別れしなくてはなりません。ところで、お別れする前に、旦那様にひとつお願いがございます。いとせここ幾年の恩情に免じてお力になっていただけますならば、この上ない幸せでございます」

インシオアン
「吟霜ノ」

ユインボン インシオアン
雲鵬は吟霜を見詰めた。その広い額、細い眉、輝きに満ちた眼、

可愛らしくそった鼻，小さな口，きめこまやかですべすべとした肌，かたちのいい手，足……これが狐だろうか？ばかばかしい，そんなことがあってたまるものか！^{インシオアン}だが？吟霜は本当に狐なのだろうか？

「願いとは何だ？言っインシオアンてごらん，吟霜」

「あと二日しましたら，私を城外の西にあるあの森へ担いで行って下さいませ。森に着きましたら且那樣方はすぐそこを離れ決して私にかまったり覗いたりしないようにしていただきます。そうすると私はきっとまた狐に戻ってもとの生活を続けましょう。でも，もし私の言う通りにしていただ
けませんでしたら私はきっと死んでしまいます」

^{ユインボン}雲鵬は驚いて首を激しくふりながら大声で叫んだ。

「いかん！／いかん！絶対にかん！お前は今どうかしてるのだ。いかん！／お前をあの森の中に置いたら凍え死んでしまうではないか！」

「且那樣，私は狐なのでございますよ！」

^{インシオアン}吟霜はその黒いつぶらな瞳で^{ユインボン}雲鵬をじっと見詰めた。

^{ユインボン}雲鵬はあの荒野の中の白狐を思い出した。そうだ！これはまさにあの『白狐』の眼だ！彼は意識が朦朧として額から汗が滲み出た。

^{インシオアン}吟霜は^{ユインボン}雲鵬の手を強く握り緊めて言った。

「おわかりでしょうか？且那樣，私はもともと山林や原野に棲んでいた
のでございます。こちらのお屋敷に伺いましてから私も大変幸せではござ
いしましたが，やはり昔のように自由自在というわけには参りません。私は
結局は人間でないのですからどうしても人間の生活には馴じみきれないので
ございます。もし且那樣が無理にこの^{インシオアン}吟霜をお引き留めになるの
でしたら私は結局死ぬほかございません。且那樣はそんなに私を死なせたい
のでございますか？」

「あー^{インシオアン}吟霜よ，わしはどうすればよいのだ。^{インシオアン}吟霜！そなたがどう
してもここに居れぬというのなら，どうしてここに来たのだ！／どうしてわ
しの前に現われたのだ！」

^{インシオアン}吟霜も切なげであった。涙が糸の切れた真珠のように頬を伝って落ち
た。^{ユインボン}雲鵬の手を一段ときつく握り緊めると，^{インシオアン}吟霜はしみじみと言う

のであった。

「旦那様、どうか私の代わりとお思いになってあの子を大事に育てて下さいませ、私は森の中でも充分楽しく暮らせますから、ご安心下さい。ご縁がありましたら、又、いつかお目にかかれる時もあると存じます。では、お別れでございます、旦那様。私が申しました通りにして下さい。私が死んでしまってもは取り返しがつきません。では、お姉様をお願いする事がございますので、お呼びしていただきたいと存じます」

ユインボン雲 鵬の心はちちに乱れ胸が張り裂けるばかりの思いであった。彼は涙を押えて部屋を出たが、悲しみの余り魂の脱けた夢遊病者のように、ただ茫然としていた。²²⁾

ノンユイ弄玉夫人も涙ながらに インシオアン吟 霜の部屋に入ったが、そのまま一晩中彼女の側を離れなかった。

あくる日、ユインボン雲 鵬は朝早く出かけた。上司である府知事が県内の巡視に来るので、彼はそれに随行しなければならなかったからである。そのためその朝は、インシオアン吟 霜を見舞う暇がなかった。

夕暮れに帰宅した ユインボン雲 鵬は、いとホ官服を脱ぐ違もなく インシオアン吟 霜の部屋に駆けつけた。中に入った ユインボン雲 鵬は驚きの余り声も出なかった。部屋の様子は全然変わっていなかったが、とこ床の上に彼女の姿が見えないのである。

その時、ノンユイ弄玉夫人が、ユインボン雲 鵬帰宅の報を受けて慌ただしく駆けつけ、涙ぐみながらに言うのであった。

「あなた、インシオアン吟 霜はもう出て行きました」

「出て行った？どこへ？」

「私達はあれの言う通り城外の西の森へ送りとどけました。インシオアン吟 霜にどうしても、と頼まれましたものですから。あなたが帰れば決して放してくれないから、と言うのです」

ユインボン雲 鵬は地団太踏んで怒鳴った。

「たわけ者め、どうしてあれの言うなりになったのだ、あれは病気で、

訳註22) 原文は「痛心之餘，真不知神之所之，魂之所在」。

うわごとを言っているものを、なんで信じたりするのか。誰が担いで行き、どこに置いてきたのか？誰か、^{みより}看護の者を残して来たのか？」

「^{コージョウ}葛昇 たちに担いで行かせました。そしてあれの言う通り^{くさはら}草原の中に置いて一同帰って来ました。約束ですもの、誰もそこに残って彼女の様子を見届けるわけには参りませんでした」

「ああ、馬鹿な奴らだ！なんたる事だ！」

^{ユインボン}雲 鵬は目まいがするのを覚えた。彼は手の平で額を叩きながら^{コージョウ}葛昇に急いで馬の支度をするように命じた。彼は森へ急行して自分の目で現場の様子を確かめたかったのである。

「あなた、^{インシオイン}吟霜 はそのままそっとしておいておやりなされませ、日も暮れて、途中が難儀でございます」

「いや、わしはあれを連れ戻さねばならぬ。山には虎も狼もいるではないか！同じ死ぬにしても、畜生のえじきにされたのでは、あれも浮かばれまい！」

^{ノンユイ}弄玉夫人の諫めるのも聞かず^{ユインボン}雲 鵬は供を従えて城西の森を目指して馬を馳せた。城を出るとたちまち険阻な山道にさしかかった。秋風が黄昏の荒野を悲鳴をあげて吹きすさぶ。こんなところに^{インシオイン}吟霜 が一人捨てられているのかと思うと、彼は矢も盾もたまらず、馬に鞭を当てると先を急いだ。

ついに彼等は森に着いた。^{コージョウ}葛昇は馬を止めて言った。

「ここでございます。旦那様！」

^{ユインボン}雲 鵬は馬を停めてあたりを見廻すと、森の中の草むらにぼーっと白い影が見えるではないか。^{ユインボン}雲 鵬は、はっとして転げ落ちるようにして馬から下りると、まっすぐにその白い影目がけて駆け寄ったが、^{インシオイン}吟霜 と思いこんで抱きすくめようとして驚いた。それは^{インシオイン}吟霜 の衣裳と靴で、中^{もぬけ}は蛻の殻であった。

「^{インシオイン}吟霜 ！」と叫んで^{ユインボン}雲 鵬は遺された衣裳を手にしてみると、上から下までまっ^{さら}新で正に別れの旅支度、行方知れずが怨めしかった。

彼はふらふらと立ち上がると茫然としてあたりを見廻した。森は鬱蒼

として果て知れず、樹の影が無気味に重なり合い、暮色の中に厚い霧が立ち籠める中を、索莫たる秋風が木々の梢を渡って哀歌を奏でていた。²³⁾ 原野の起伏は黒い影をつくって、際限なく続く。吟霜^{インシオアン}はどこにいるのだ？彼は吟霜^{インシオアン}の衣裳を抱きしめたままそこに立ちつくした。しじまを破る山風に枯葉が舞う。

老僕^{コーシヨシ}の葛昇^{コーシヨシ}が歩み寄り、涙を浮かべながら言った。

「旦那様、白姑娘^{ハイターコヤン}はご自分の故郷に帰られたのでございます。どうかそのようにお悲しみになりませぬよう……」

……そうか？そうであったのか？彼女^{あれ}は本当に白狐にかえって、山野に戻ったのか？雲鵬^{ユインボン}は仰首し天に問うても天は答えず、俯首して地に問い質しても、地は語らなかった。胸に抱いた衣類に頬を押し当てて見れば、ほのかに吟霜^{インシオアン}の移り香が残っているではないか。去り難い想いで雲鵬^{ユインボン}はなおそこに立ちつくした。心は千々に乱れ、涙がとめどなく頬を伝って流れた。供の者たちも、うなだれたまま口を利こうとしなかった。山風は一段と吹きすさび、梟^{ふくろう}が樹上で哀しげに啼いている。日が落ちて寒天^{さむざら}にまばらに星^{きらめ}が煌きはじめた。

老僕^{コーシヨシ}の葛昇^{コーシヨシ}は再び跪いて言った。

「旦那様、もうおそうございます。どうかお帰り下さいますよう。旦那様がそんなにお悲しみでは、白姑娘^{ハイターコヤン}もかえってお心残りでございますよう」

今になって、どれほど思い焦れても、もはや詮なしと悟った雲鵬^{ユインボン}は、涙を浮かべながら心の中でこう祈った。

「吟霜^{インシオアン}よ、そなたが本当に白狐であるのなら、危い目などに遭わぬよう、迂闊に獵師のそばに寄るでない。心して虎狼に近づくでない……そなたに、心あらば、わしがそなたを想う心に免じて時には元気な姿を見せて来てくれ！」

祈り終えると雲鵬^{ユインボン}は断腸の思いを残して帰途に着いた。

訳註23) 原文は「森林綿密，樹影重重，暮色惨淡，烟霧迷離，秋風瑟瑟，落木蕭々」

かくて^{インシオアン} 吟霜^{コー} は葛家から姿を消したのであったが^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} はいつまでも
^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} のことが忘れられず、恩愛の情はつゆりこそすれ減退することはな
^{インシオアン} かった。吟霜^{インシオアン} が寝起きしていた部屋に入っては^{インシオアン} 小声で^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} の名を呼
^{インシオアン} び、吟霜^{インシオアン} が着ていた衣類に^{インシオアン} 触れては「吟霜^{インシオアン} 」と呼びかけ、吟霜^{インシオアン} の
^{インシオアン} 奏でた琴を撫でては、「吟霜^{インシオアン} 」とつぶやくのであった。

^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} の生んだ子供は、非常に愛くるしく、その眉と目は母親そっくり
 であった。彼はよくこの子供を抱いては話しかけた。

「坊や、坊やのお母さんは？坊やのお母さんはどこへ行ってしまったんだ
 だろうなあ？」

この涯しない慕情と身を削られる程の気遣いのために、^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} は日毎に
 やつれていった。

その様子を眼にして、^{ノンユイ} 弄玉夫人^{ユインボン} も気が気でなく、ある日^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} に、
 「あなたがそんなに^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} のことばかり考えておいでですと、私だっ
 て妬ましい気持ちになります！」と言った。

^{ノンユイ} 彼は弄玉夫人^{ノンユイ} をそっと抱き寄せ、じっと見詰めながらやさしくこう言っ
 た。

「^{ノンユイ} 弄玉よ、お前が^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} を妬む筈がないではないか？お前もわしと同
^{インシオアン} 様^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} が大好きであれ程可愛がっていたではないか」

「^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} もあなたがどれほど思い悩んでおられるかが分かって戻って
 来てくれるといいのですけれど。でも、旦那様、あなたも私と子供達のためにも
 もっとお体に気をつけていただきませんか？！いかがでしょう。明日から
 気晴らしにあちこちお出掛けになりましたは！」

^{ノンユイ} 弄玉夫人^{ユインボン} に心配をかけてはと、^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} はしぶしぶそれに応じた。だがど
 れほど名勝古跡を訪ね、友人と酒を酌み交しても、^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} を偲ぶ気持は打
 ち払うことができなかった。

かくして一年が過ぎ去った。

^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} が遺した子供も、いつの間にか片言が話せ、よちよち歩きが出
 来るようになったが、^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} はその子供を見ては、^{インシオアン} 吟霜^{インシオアン} を想い出す始
^{ノンユイ} 末^{ユインボン} であった。弄玉夫人^{ユインボン} はある日笑いながら、^{ユインボン} 雲鵬^{ユインボン} にこう持ち掛けた。

「あなた、この世の中に美しい人は幾らでもいます。きりもなく吟霜^{インシオアン}を想い焦れていらっしゃるよりは、いっそのこともう一人お貰いになりましては？」

「くだらぬ心配は無用じゃ！」

雲鵬^{ユインボン}は眉をしかめて苦々しげに言うのであった。

弄玉夫人^{ノンユイ}は言葉を返さなかった。彼女には「海(吟霜^{インシオアン})を知る者には、川(並の美人)など論外」²⁴⁾ という夫の心情がよく理解できたからである。彼女は夫に隠してなにかを画策している模様であったが、雲鵬^{ユインボン}が気がついた時には吟霜^{インシオアン}が使っていた幾間かの部屋に手が入れられていた。雲鵬^{ユインボン}は爰に思つて尋ねると、「この部屋を新しくして、あなたにまた良い方を一人お世話して差し上げようと思ひましてね」と彼女はにこにこしながら答えた。

「この部屋はそとしておけ！時間も無駄にすることはない。お前が誰かを連れて来ても、わしはいらぬぞ！」

雲鵬^{ユインボン}は不機嫌であった。弄玉夫人^{ノンユイ}は祈るような眼差しを夫に向けながら言った。

「私は吟霜^{インシオアン}よりもっと綺麗な娘^{ひと}を見つけて差しあげます。とにかく私におまかせ下さい。連れて来たのを御覧になってお気に召さなければお断りになればよろしゅうございましょう。もう一年も経つというのに、あなたはいつまでも眉に皺を寄せて悲しそうな顔ばかりしておいでです。一体私達にどうしろとおっしゃるのですか？」

雲鵬^{ユインボン}は思わず深く溜息をつくとき、無言で夫人の華奢な肩^{きやしや}に手を置いた。静かに彼女のほつれ毛を撫でながら異様な感動が湧き上がるのを覚えた。

弄玉^{ノンユイ}よ、そなたはわしにはすぎた女房だ！ほかに人を探すのはやめて呉れ。その代わりわしは必ず今日から発奮して仕事に精を出すぞ！」

「それがよろしゅうございます」

弄玉^{ノンユイ}の顔はほころび、目には涙が溢れていた。

訳註24) 原文は「曾經滄海難為水，除却巫山不是雲」。

雲ユインボン鵬トウはそれから無理にでも笑顔を見せ、また応酬つきあいや宴会などにも顔を出して歌舞に興ずるようになったが、心の底ではなお吟霜インシヨアンを忘れ去ることが出来なかった。ただ弄玉夫人ノンユイにそれと覚とられてはと、顔に出すようなことはなかった。

一方、弄玉夫人ノンユイは吟霜インシヨアンの部屋の模様替えを済ませた。雲ユインボン鵬トウは夫人が『良い娘を連れて来る』考えを棄てていないのを知ったが、それが好意から出ているだけに文句のつけようがなかった。

ある日、いつものように外出先から帰った雲ユインボン鵬トウは、門を入れて只ならぬ気配を覚えた。老僕コウボク、葛昇カクシヨウの笑いに意味ありげな様子が見られ、書童シヤウドウの喜児キキも何か陰でこそこそ立ち廻っており、召使いの女達はこと更に主人を避けている様子であった。²⁵⁾不審顔の雲ユインボン鵬トウを、弄玉夫人ノンユイが笑みをたたえて迎えた。

「あなた、やっというい娘が見つかりました。」

なんだ、そうだったのか！と雲ユインボン鵬トウは些か不機嫌そうに眉をよせた。

「どこにいるのだ？」

「吟霜インシヨアンの部屋で手持ち無沙汰にしています。行ってご覧になりましたは？」

「吟霜インシヨアンの部屋だと！雲ユインボン鵬トウは大変不愉快だったが怒る訳にもいかなかった。

雲ユインボン鵬トウは喜びに溢れる夫人の様子を見ては、むげにその申し出を断われもせず、夫人を伴って部屋をおとずれた。戸口の所まで来ると夫人は彼を呼び止めて、

「ちょっとここでお待ちになって下さい。あの娘こも歌が唄えます。まず一曲お聞きになって吟霜インシヨアンと較べてご覧になりましたは？」と言った。

雲ユインボン鵬トウは奇異にも感じ、煩わしくも思ったが、その時はすでに部屋の中から琴の音が流れていた。

これは！良く聞き慣れた音色だ！そう思っているうちに、すぐ続いて珠

訳註25) 原文は「鬼鬼崇崇」、陰でこそこそとすることを意味する。同義語としては、〔鬼々随々〕、〔鬼々溜々〕、〔鬼々搗々〕などがある。

を転がすような歌声が伝わって来た。

『香夢より回りにて

紅鴛の蒲団より褪け出す、
檀唇を重ねて胭脂を点け、
匆々に抛家髻を結びたり、
この春愁を如何にせん？
……………』

雲 鵬ユインボンは一瞬体がぶるぶると戦くのを覚えた。そんなことがあり得るだろうか？彼は我を忘れて大股で敷居を跨ぐと、サッと簾みすをおし上げてまっすぐ部屋に駆け込んだ。東の間雲 鵬ユインボンは、茫然として立ちすくんだ。一人の白づくめの衣裳をまとった女が琴を膝に置いて、彼の方に笑顔に向けているではないか。これは吟 霜インシオアンでなくて誰だというのだ！

「吟 霜インシオアン」

彼は声にならぬ声でそう叫びながら、我と我が目を疑うばかりであった。

吟 霜インシオアンは手にしていた琴を抛り出すと雲 鵬ユインボンの前に艶き涙を浮かべて言った。

「且那樣、只今帰ってまいりました。もうこれからは、どこにも行ったりは致しません」

雲 鵬ユインボンは夢心地で彼女の頬や髪をそっと撫でていた。彼女は前と同じように豊満な体つきからだをしており、病氣をする前に較べても一段と美しかった。彼はげんなおももちで尋ねた。

「本当にお前なのか？吟 霜インシオアン！本当だね？お前は本当にあの山から帰って来たのだね？もう二度と狐に化けて山へ帰るようなことはないだろうな？」

弄玉夫人もその場に駆け寄り、いたずらっぽく顔を綻ばせながら吟 霜インシオアンと並んで雲 鵬ユインボンの前に跪いて言った。

「あなた、どうか私達をお許し下さい」

ユインボン
雲 鵬はますます話が分からなくなってしまった。

「どうしてなのだ？これは一体どうした事なのだ」

「私達は旦那様を騙していたのでございます」

インオンオアン
吟 霜は、涙を浮かべながらも笑顔で言った。

「私は決して『白狐』ではございません。もともと狐などではなかったのでございます」

「それでは……」

ユインボン
雲 鵬の頭はすっかり混乱して分別がつかなくなってしまった。

「実はこうなのでございます。旦那様、あの時の私は本当の重病人で、自分でももう助からないと思っていました。昔、漢の武帝のお妃^{きさき}、李夫人が大病を患われました折、帝^{みかど}の不興を買うのを恐れてその憔悴した姿をお見せなさらなかったそうでございます——その時私も同じような心境でございました。そのうえ旦那様は私を愛する余り、私の死をご覧になれば、どんなにお敷きになるかと心配で、それで私はお姉様に相談をしてあの様なお芝居を仕組んだのでございます。もともと私が狐だと噂されておりましたのを幸い、もとの狐に戻って山野に帰るのだと旦那様を言いくるめたのでございますが、実を申せばお姉様が私のために別に住居を一棟用意して、そこに若い侍婢と年配の女中を買って来て私の看病につけて下さりお医者にも診^みに来ていただいていたのでございます。そしてもし私が息を引き取ればお姉様が密かに埋葬をして下さり旦那様には永遠にこのからくりをお教えしないことになっていました。またもし私が全快しましたら、その時は私が再度旦那様のお側に参り総ての真相をお話しする心算でございました。幸い神様の御加護に依りまして一年の療養で全快出来たのでございます」

「だが……だが……わしは確かにあの森の中でそなたが脱ぎ捨てた衣裳を見たが、」

ノンユイ
弄玉夫人が笑顔で答えた。

「ああ、あれも私たちが葛^{コージョシ}昇を遣って前もってあのようにさせて置い

たのです。あなたがきつとご自分で確かめにお出でになると思ひまして」

「なんだ葛昇コーシヨウも共犯者だったのか！」

「共犯者はまだ沢山おります。お屋敷の使用人たちも大半は事情を知っていたのですが、ただあなたに対して知らぬ振りをしていただけなのです。あなたが朝な夕な吟霜インシオアンのことを思っておいでになったその頃、吟霜インシオアンはつい私達と目と鼻の先、路地を隔てた向かいの邸にいたのです！それからあの葛昇コーシヨウは共犯は共犯ですけれど、今だに吟霜インシオアンのことを白狐ではないかと疑っているのです！」

と弄玉夫人ノンユイはいかにも楽しげに説き明かすのであった。

吟霜インシオアンも面白そうに笑って言うには、

「私が白狐かどうかは、一生わからず終いになると思ひます。香綺ジャンチイでさえ今の私を信じきれなくて、まだ私の名前を書いた位牌を供えている²⁶⁾くらいでございます」

雲鵬ウンボンは吟霜インシオアンから弄玉ノンユイへ、弄玉ノンユイからまた吟霜インシオアンへと交互に眼をうつして見較べているうちに、突然彼は我に返って意識をとり戻した。そして目の前にある事が夢ではないと分かると、堰を切ったように大きな感動の波が押し寄せて来た。身をかがめて、ひしと二人を抱き寄せると、声を震わせて言うのであった。

「この世にわしほど幸福な者があるだろうか？これほどの奇遇がまたとあるだろうか？」

そう、またとあるであろうか？この世にはこれまでいろいろな出来事があった。不思議な、複雑な、そしてまた美しい、悲しい、数え切れぬほどの出来事、語り尽せぬほどの物語、があった。だが、これほどに数奇的な出来事がまたとあったであろうか？

—— 完 ——

訳註26) 原文は「供着長生牌位」、つまり生存している人の名前を書いた位牌を供えることである。「長生禄位」とも言う。

— 訳者あとがき —

ここに訳出したのは、中国台湾で精力的に活躍している女流作家、瓊瑤^(ジョウヤウ)女史の中篇小説『白狐』^{ハイフウ}の全文である。この作品は1971年3月、月刊誌『皇冠』(第35巻第1号、通巻第205号、43～84頁)に発表されたもので、のちに単行本となって皇冠雑誌社から発売されている。

『白狐』は著者によると、その物語は埋没された数々の伝奇的故事の一つにすぎないということである。作品の時代的背景は定かではないが、一応明・清のいずれかの時代を想定したものと思われる。以下は伝奇的な読切連載小説の第1篇として、この『白狐』を発表した時の序文である。

『你可聽說過那些古老的老故事？

你可聽說過那些久遠以前的傳奇？

你可知道有多少曲折的，動人的，奇異的，悲涼的故事，都已湮沒在
時光的流逝之中？

我願為你述說：那些老故事，那些——湮沒的傳奇。』

瓊瑤は処女作の『窗外』の登場で、文壇において一躍脚光を浴びてからというもの、その多くの作品が映画化されたり、連続テレビドラマ化されたりした。以下は女史の単行本として皇冠雑誌社から刊行された小説集のリストである。その内、映画化された作品には※印、テレビ化された作品には◎印を冠した。

※『窗外』 ※『煙雨濛々』 ※『六個夢』 ※『幸運草』 ※『菟絲花』
※『幾度夕陽紅』 『潮声』 ※『船』 ※『紫貝殼』
※『月滿西樓』 ※『翦々風』 ※『彩雲飛』 ◎『庭院深々』
◎『星河』 『水靈』 『白狐』 ※『海鷗飛処』 ※『心有千千結』
※『一簾幽夢』 『浪花』 『碧雲天』 『寒煙翠』

作者の経歴について紹介すべきであるが、資料が得られず、訳者として慙愧に堪えない次第である。狐を物語の主人公とする作品で著名なものとして、12世紀フランスの『狐物語』(Le Roman de Renard), 17世紀中

国の『聊齋志異』(清, 蒲松齡著 <1640~1715>)。手稿本, 12巻本, 16巻本, 18巻本があるが, 執筆期間はかなり長期に及び, 康熙18年頃すなわち著者が40歳前後に完成したものらしいと言われている。)等があるが, これらは狐に名を借りたもの, 又は化身として登場している。『白狐』はこの伝統を踏まえているようであり, 実は, 「白狐」ではなく, 真実の人間であるとする点で興味深く, 翻訳の意欲を湧かせたわけであった。作家像について関心を持つ方は, スタンフォード大学で教鞭をとっておられる蕭毅虹女史の評論を参照されるとよい(蕭毅虹「花呀草呀雲呀天呀水呀風呀——瓊瑤作品的今昔」, 『書評書目』雑誌・第16号, 1974年8月, 30~45頁)。尚, 文芸評論家陳克環氏と周伯乃氏の論評も一読に値すると思われる(『文藝』月刊, 第64期, 1974年10月号所載, 陳克環「瓊瑤的困惑」, 147~152頁・周伯乃「瓊瑤的『窗外』与『浪花』」, 152~161頁)。

翻訳については, 呉世澤氏の全面的な協力を得たほか, 前篇すなわち(Ⅰ)においては中京大学古屋二夫教授ならびに名古屋大学柴田庄一講師の助言を乞うた。後篇(Ⅱ)にいたっては, 古屋教授が原文と照合し, 細部にわたって添削を賜わった。これら諸氏の好意にたいしては感謝の言葉がない。

(1975・5・6)

【付記】

初校を終えた時点で, 突然原著者の略歴を入手できたので, 追録する。出典は中国文芸協会編『当代文芸作家名録』(1970年)であるが, 本資料ならびに書評に関する資料を提供して下さったのは, 台湾笠詩刊社(Li Poets Association) 社長陳秀喜女史と林煥彰氏であることをここに記し, 謝意を表す。

瓊瑤(本名: 陳喆, 出身: 中国湖南省衡陽, 生年月日: 1938年4月20日, 現住所: 台湾台北市郵政3366号信箱。1969年までの小説集とその出版年代は次の通りである。

『窗外』 1963年, 『煙雨濛々』, 『六個夢』, 『幸運草』, 『菟絲花』 以上
1964年, 『潮声』, 『船』 以上1965年, 『紫貝殻』, 『寒烟草』 以上1966年, 『月
満西楼』, 『翦々風』 以上1967年, 『彩雲飛』 1969年。なお, 上記の内『六
個夢』と『幸運草』は短篇小説集, その他はすべて長篇小説である。